

鈴の音が遠くまで広がる遍路道（5年3月29日17日目）

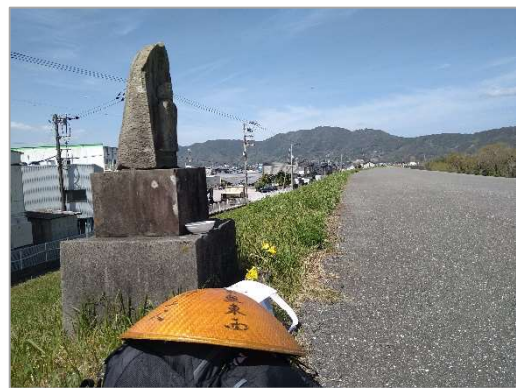
ほとんどが平坦地で、行程の最後となる標高140mの清瀧山山頂近くに建つ35番札所青龍寺直近だけが登りです。天気も晴れており、遠くに見える清瀧山を目指しながら川沿いを歩くのどかな歩きお遍路です。34番札所種間寺と35番札所清瀧寺の2霊場を巡拝します。

昨日に拝観を済ませた33番札所雪蹊寺まで戻ってから次の札所を目指します。今日も20kmを少し超える程度の距離なので、多少道を間違えても焦ることなくゆっくり目に歩けました。33番札所雪蹊寺から34番札所種間寺までは、田畑の中に住宅が点在するのどかな田園風景の中を歩く遍路道です。

34番札所本尾山朱雀院種間寺（たねまじ）の御本尊は、安産の薬師として知られている薬師如来です。このお寺には、沢山の底のないひしゃくが子育て観音像を取り巻いている建物があります。妊婦さんは、ひしゃくを持って安産祈願に訪れ、お寺ではひしゃくの底を抜いてとおりをよくして難産にならないようにと祈禱をして渡してくれるそうです。無事生まれたらそのひしゃくをお寺に納めると言うことです。昔も今も妊娠出産は命がけです。底のないひしゃくの数を見ると、無事生まれて安堵している姿が見えてくるようです。

35番札所医王山鏡池院清瀧寺（きよたきじ）へは、一級河川仁淀川（によどがわ）に沿って歩く土手道があります。仁淀川流域は、越前、美濃と並んで、和紙の三大産地のひとつ、土佐和紙の中核でもあり、「仁淀ブルー」と名付けられる神秘的な色彩の清流を見ることができます。土手道を歩いていると、金剛杖の鈴が遠くまで吸い込まれるように響き渡ります。

仁淀川の土手は、コンクリート護岸となって昔とは違う形状になっていると思うのですが、清瀧山と仁淀川の組み合わせに何ら変わりはなく、多くのお遍路さんが清瀧山（標高378m）を正面に見ながら土手を歩く姿にも変わりはないように思います。お地蔵さんのそばで、靴を脱ぎ素足になってチクチクする草に足を投げ出し、草枕でゆっくり流れる綿飴のような雲を眺める。お地蔵さんに御真言を唱え、家族や知人の無病息災、そして道中の安全を願う。



仁淀川の土手で一休み

何百年の時を経てもこうした姿は変わらないように思えます。この様なことを考えると、タイムスリップして時空を越え、悠久の歴史の中と現在とを行ったり来たりする感覚を覚えます。これも歩きお遍路の醍醐味なのかも知れません。

35 札所清瀧寺へは、お寺に近づくにつれて細くて急勾配の遍路道になります。標高差が 100m を越える遍路道は、八丁坂と呼ばれ八つの坂が連続しています。ようやく着いた龍の天井画が見下ろす仁王門をくぐると、更に真っ直ぐな急勾配の石段が続き、境内まであがると高さ 6 m の巨大な薬師如来像に迎えられます。このお寺は、魔除け祈願の名刹で、巨大薬師如来像の台座は、戒壇巡りができて魔除けのご利益を授かることができます。



巨大な薬師如来像と本堂

今日は、何となく昔の風景を想像しながらの歩きでした。河沿いを歩きながら、遠くの山にあるお寺を目指す。こんな風景のなか、昔の人達はどんな風に歩いたのだろうか。服装は、食事は、何より靴は何を履き、水疱対策はどうしたのだろうか。テーピングテープや皮膚保護クリームなどない中で、どのような工夫を施して歩いたのだろうか。現在よりも相当過酷だったと思うのです。これまで歩いてきた遍路道では、結構墓碑を見ることはありました。上部に五輪塔を刻んだ金剛杖がその際の墓標になるというのは、とても現実味のあるお話だと感じました。

現在は、お遍路の途中で行き倒れ遍路道に沿いに墓碑が建てられるなどというお話は聞いたことがありません。それでも、山中の細い遍路道を歩いていると、転倒したり谷に転落しそうになったりしているので「ありうるかも」と思うのです。そう考えると、何が起きるか分からないという点では昔と変わりがなく、起きた後の対処方法が変わっただけなのかも知れません。我が家では、途中で怪我や病気になっても迎えには行かないと言われてお遍路に出てきています。もしかしたら、現代になって初めての金剛杖墓碑が立つかも。気をつけないと。

行程等基本データ (3月29日17日目)

- ・巡拝寺院：2 寺巡拝 (34 番札所から 35 番札所)
- ・天気：午前 晴 / 午後 晴
- ・歩いた時間：9 時間 00 分 / 日 (6 時 50 宿発～15 時 50 分着)
- ・歩いた距離：24.3 km (平均速度：2.7 km/h)
- ・通過市町村：3 市 (南国市・高知市・土佐市)
- ・高低差：128m (2m⇄130m)
- ・消費カロリー：2,758 kcal